

使徒言行録23章 12-35 節

『証しの勇氣』

使徒言行録を書いたルカにはこの書物を書こうとした動機がありました。その動機は決して一つではなく、いくつもあったと推察できるのですが、大きく二つあった、と思われまふ。一つは、これまで申し上げてきたように、最初のキリスト教会の伝道の歩みを伝えたいということだろうと思ひます。その場合読者であるのは、今教会で信仰生活をしていゝるすべての人たち。求道者。まだ福音を聞いたことのない人たちも含め、すべての人に使徒言行録を読んでほしい、ということだろうと思ひます。

しかしもう一つ、ルカには大事な執筆動機がありました。それは使徒言行録の冒頭にあるようにテオフィロという人物に宛ててこの書物を書いている、ということだす。テオフィロという人がいったいどういふ人だったのか、実はほとんどわかっていません。しかし、いろいろなことから推察するに、ローマ政府の高官、それも相当に地位の高い高官だったのではないか、と想像されまふ。そしてルカの後援者、支援者だったのではないか、と想像されまふ。このテオフィロに対してルカは、福音書を書き、今またこうして使徒言行録を書くことで、キリスト教はローマ政府と何ら対決したり、脅かす宗教ではない、むしろキリスト教徒はこのよふなものなのだ、ということを紹介し、書き記した。それによつてローマ帝国に誤らずに認知してもらいたい、という願ひがルカには込められていたのだす。

パウロが三回目の伝道旅行を終えてエルサレムについてからの使徒言行録21章以降の記述がそれまでの記述と比べてやたらと詳しく、細部の描写まで丁寧に書き込まれているのは、ひとつには、テオフィロにこの一部始終を報告して、パウロに対して、ローマの守備隊の隊長をはじめ、この地方を統括している総督が、いかに公平冷静に事柄と向き合ってくれたか、ということだを丁寧に報告する、という意図があった。キリスト教は人々に不安を与えるよふな宗教ではない、というアピールになっていたのだと思ひます。パウロがエルサレムで騒動に巻き込まれたのは、あくまでユダヤ教との律法をめぐる問題であつて、つまり宗教上の問題であつて、政治的な騒動ではないのだ、という報告になっているのだす。

さて、今日の聖書箇所はエルサレムで捕らえられたパウロを殺害しようとする一部ユダヤ人たちが陰謀をたくらみ、パウロを再尋問するよふ呼び出し、そ

の護送中に殺害しようと計画を立てます。ところがこのたくらみをパウロの姉妹の子、甥っ子が聞きこみ、兵營の中にいるパウロに知らせます。パウロはこの甥っ子を千人隊長のところに送り、たくらみを知らせます。千人隊長からすれば、ローマの市民権をもった人物が拘束中にユダヤ人によって殺された、ということになれば、当然自分の責任が問われる。それで直ちにパウロをこの地域をすべて管轄する総督のいるカイサリアに護送することにして、驚くほどたくさんの兵隊を引き連れてパウロを護送させます。そして総督フェリクスのもとへと送り届けるのです。千人隊長は総督宛の手紙をしたため、事情説明をします。パウロは護送されたその日の夜アンティパトリスまで行き、翌日カイサリアに到着。総督は手紙を読み、「お前を告発する者たちがきてから尋問する」と言ってパウロを留置、パウロの身の安全はローマによって確保されたのです。

23章の12節から35節に書かれていることは要約すれば以上のことです。ここには先ほどからいうような、ローマ政府向けの丁寧さ、詳細さがあります。しかしそうした中で、わたしたちはここから何を読み取り聞いていくのでしょうか。

23章の11節にこういう言葉がありました。

「その夜、主はパウロのそばに立って言われた。『勇気を出せ。エルサレムでわたしのことを力強く証ししたように、ローマでも証しをしなければならない。』」わたしたちは聖書の中に主の言葉が語られ、その言葉を聞いた、というような記述があると、そうか、とすらすらと読み進んでいくこともあるのですが、そもそも主の言葉が聞ける、とはどういうことなのでしょう。パウロはなぜ主の言葉を聞いたのか。どうして聞くことができたのか。いろいろな疑問が沸き起こってくるのです。

エルサレム入りしてからのパウロの身边はめまぐるしく変化しました。群衆が扇動されて、パウロに対する激しい攻撃、リンチが加えられたり、千人隊長によって身柄を保護されたり。そういう中で、主がパウロのそばに立って、み言葉を語ってくださった、とあれば、なんとというタイミングの良さ、と思う人もいるかもしれません。実際自分たちが困難に直面したとき、こんなにもタイミングよく神の言葉が聞こえてくるのか。

しかし。わたしたちはそもそも聞く、ということがどういうことなのか、あらためて思いめぐらしてみる必要があります。聞く、という場合、何も言葉だけでなく、音、鳴き声、音楽、言葉、さまざまな聞くがあるのですが、今人間の言葉に限定して考えてみると、その言葉が一過性のもの、通り過ぎていくだ

けの言葉ではなく、自分の中に深く入り込んでくる言葉を聞く、という場合、最初に強烈なインパクトと共に与えられる言葉もあるでしょう。高校の教師が授業で語った一言が自分を驚掴みにした、という聞くもあるでしょう。逆に当初は強い印象も持たず、ずっと忘れていたのに、ある時ある状況の中で親の言葉を思い出して、しみじみと聞く、という聞くもあるでしょう。さらには、相手の言葉をはじめて聞いた時に、自分としての理解をもち、その時はその時で聞いたつもりになっていたのだけれど、時間の経過の中で、あの時あの人が言った言葉はこのことを指していたのではないか、あの時の聞き方はあれでよかったのか、と気づかされていく、そういう新たに聞きなおす聞くもあるでしょう。主イエスの弟子たちは主イエスが十字架にかかる以前、主イエスの言葉をたくさん聞いていた。例えば、主イエスは十字架にかかる前、弟子たちの足を洗ってくださった。その時、そんなことはしないでくださいというペトロに向かって、「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる。」と言われたあの言葉。確かに言葉は聞いたが、その言葉が何を語ろうとしているのか、皆目わからなかったのではないか。ペトロは。でもわからなくても聞いていた。聞いて、わからない言葉として聞いているのです。ペトロは十字架で死に、復活してくださり、そして再び自分に語りかけてくださる主に会うことの中で、もう一度あの主の言葉を聞きなおしていく。わたしがあなたを洗わないなら、つまり十字架に拠る罪の贖い、洗いがなければ、十字架がないとすれば、あなたはわたしと何の接点もないのだ、ということ聞きなおした。

聞く、という行為行動は、わたしたちが思っている以上に実は能動的な行為なのですが、聞くということでは大事なことは繰り返す、ということなのではないか。最初に強烈なインパクトという場合も含め、人は繰り返し聞いて、何かを聞いていく。最初に聞いたりかいは違う何かを与えられたり、わからないままに聞いて、わからないままに繰り返し聞いて、ある時、聞いたものの世界が開かれる、ということもある。聖書を何度でも読む。ということがよく言われますが、これは単なるお題目でも、もっとお勉強しましょうというような訓話でもない。繰り返し読み繰り返し聞くことでしか、聞けないことがあるからなのです。そもそも一度聞いてそれでわかるわからないというふうに決着をつけることなど、できないのではないか。

パウロが主イエスの言葉を聞いた。確かにこのとき、パウロの耳元に語りかける声があったのでしょう。しかし、同時にパウロはこれまで、自分が聞いて

きた主の言葉を何度でも繰り返し聞きなおしてきた。何度でも聞いて、その聞き取った言葉を書き記してきた人です。例えば彼の書いたローマの信徒への手紙を読むと、パウロが同じことを繰り返し書いていることに気づきます。繰り返し書くのは、くりかえし聞いてきたからです。何度でも何度でもそのことを聞いて聞いてきたから、それが文章に現れるのです。聞いた言葉が腹に落ちてわかるという表現がありますが、腹に落ちてわかるかどうかよりも、くりかえし聞いていることが重要です。わからなくて聞いている、ということも少なくない。それも大事です。わからないことを手放さないでまた聞く。パウロはキリストのまことによって義とされる、ということ繰り返し書き記しました。その義とされるというのは、移される、ということだと申し上げました。シンデレラがいじめられている場所から愛されている場所に移されたように、罪の自分がキリストの十字架と復活によってキリストの体の一部へと移される。これが彼が繰り返し聞いてきた神の恵みです。福音です。

パウロは苦しみの中で、主の言葉を聞いた。それは彼が繰り返し聞いてきた言葉です。パウロがキリストの言葉をはじめて聞いたあの召命の時にアナニアを通して聴いた主の言葉「あなたは異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器だ」その言葉をパウロは何度繰り返し聞いてきたことか。わからないままに、納得できないままに、しかし繰り返しきた言葉、その言葉の前で己の傲慢を打ち砕かれ、自己中心の自分を打ち砕かれ、否定しようとして、否定できず、この言葉によって引っ張られ、事実神の器として用いられ、遣わされてきた、主の言葉です。パウロは困難の中において、混乱の中において、主の言葉に聞いている。これが最も大事なことであり、パウロは最も大事なことを生きている。わたしたちも、聞く人でありたい。イエス・キリストの言葉を、神の言葉を繰り返し聞く人でありたい、そう思うのです。